研究資料

進路を考える学生の心得
— 武道、芸道の達人の境地を考える立場から —¹

照屋 太郎²

Abstract

The purpose of this study is to clarify the rules for students planning their future. This study is based on a book written by a Japanese master swordsman who lived in the 17th century. And, this study is also based on old Chinese philosophy which some Japanese old master swordsmen refers to.

We have to base our future off our true feelings and the thinking that is based off our true feelings like described by the master swordsman. The master swordsman described his philosophy regarding our true feelings. He described our true feelings by using the words “original mind”. And, when we put up with the effort or hardship needed to learn our true feelings, our feelings grow stronger. Then we are capable of deciding our future and learning ourselves. When this is satisfied, we can live as human beings. We can cultivate our minds and develop a sense of humanity, when we do so. When we learn ourselves and our true feelings, we can have a sound mind. We can change the world to make it a better place to live. But, if we don't learn our true feelings, there will be a lack of humanity, thus, creating a bad environment. When we run away from our effort or hardship, we develop poor judgment, and this poor judgment becomes a part of this world.

We can cultivate a sound mind, or we can have an unsound mind. So, we have the responsibility to cultivate our mind by learning from our true feelings. We have to base our way of living off our true feelings and our thinking that comes from our true feelings. This is the rule for us to decide our future.

Keywords: Mushin, master, our course of life

キーワード：無心，達人，進路

¹ The rules for students planning their future: From the standpoint of thinking master's philosophy of Budo and Geido

² Taro TERUYA, 3-20-2 Oshima, Kawasaki-ku, Kawasaki, Kanagawa, 210-0834, Japan

1. はじめに

1.1. 問題

学生は、進路を考える時、どんな心得を持つべきか。その問題以前に、心得とは何だろうか。「心得」を辞書で引くと、「なにか事に当たる場合に、わきまえておくべき事柄」とも書かれている。例として「電話をかける時の心得」「心得帳」と書かれている¹⁾。本研究では、「心得」をこの意味と考える。

教師は学生に「夢を、目標を持ちましょう」と教える事がある。夢を、目標を持つ事は良い事である。何故なら、例えば学生が生きる為に、夢や目標は、生きる張りになるからである。では何故、学生が進路を考える時にどんな心得を持つべきか、という問いを考える必要があるだろうか。答えの一つは、夢や目標が叶わず、学生が潰れる事があるからである²⁾。

例えば、筆者は半生 20 年、ボクシングジムに通ってきた。学生の例えではないが、ボクシングジムでも、学生と同年代の若者が、夢や目標が叶わず潰れて行く事がある。筆者は練習生として、そうした若者たちを見てきた。

ボクシングの試合会場は地方には無い。地方にはボクシングジムも無い。ボクシングの試合会場やジムがある都会へ、若者たちが上京して来る。彼らの多くは中学校や高校を出たばかりである。彼らにはボクシング経験が無い者も多い。彼らはプロボクサーになる夢や目標だけを抱えて、都会へ出て来る。「自分ならチャンピオンになれる」等、根拠の薄い自信を胸一杯に抱えている者もいる。彼らの内、プロボクサーになれる者はそう多くない。プロボクサーになった何割かの彼らのまた半数程は、緒戦で負ける。ボクシングでは、試合間に数カ月を挟むのが普通である。それは安全の為でもある。ピーキングにかかる時間の為でもある。ボクシングの試合が行われる興行システムの為でもある。試合に勝てば次の試合は早く決まる。負けると

次の試合は一年近く待たされる。

そのようなボクサー育成環境と興行システムの中で、チャンピオンや強いボクサーの多くは、殆ど負けない。彼らは無敗のまま 10 戦、20 戦以上の戦績を築いて行く。それに対してボクサーのヒーローをテレビや雑誌で知って上京して来た若者たちにとって、試合に負ける事は人生の大きな挫折や夢が破れる事を意味する。

プロボクサーになる夢や目標だけを抱えて、プロボクサーとしてヒーローになる事を夢見て上京して来た若者たちの多くには学歴も無い。彼らは生計の為、職業人としての将来には繋がらないアルバイトもしなければならない。彼らはボクシング練習とアルバイトを両立する苦勞を重ねる。朝早く起きてロードワークをし、昼間はアルバイトをし、夕方からボクシングジムで練習する。一人暮らしで、食事作りも洗濯も掃除も、一人で為さねばならない。プロボクサーになろうとするなら練習は普通、週 6 日である。生計を立てる為にほぼ毎日、他のアルバイトと同じようにアルバイトをしなければならない。彼らには遊ぶ暇など無い。毎日全力で練習し、働き、家事も為し、休む暇も十分でない。そして毎日、ボクシングジムで練習して行く内、彼らの多くが、彼ら自身よりも才能に恵まれた友人に出会いその友人を羨望し、才能に恵まれない彼ら自身に失望する。それでも、彼らは夢破れて故郷へ帰る気にはなれず、都会に留まり続ける。筆者もかつて一年間あまり、彼らと同じ生活をした。彼らの苦勞はひどい。

「そんな苦勞は社会人の若者として当たり前」と言い捨てる向きもあるだろう。ただ、筆者はかつて彼らと同じ生活をした者として、その苦勞を知っているからこそ、彼らに対してそのような言い捨てはしないだろう。筆者が彼らと同じ生活をした一年間あまり、筆者が生活していた環境と、筆者の仲間だったボクサーたちが生活していた環境は、大きく違っていた。筆者はその一年間あまり、筆者の仲間だったボクサー

たちが互いに助け合って生活していた苦勞よりも、ずっと深刻な苦勞をした、と考えている。筆者はその一年の半ば以降、病氣になってしまった。筆者は今も通院を続けている。筆者の主治医は筆者に「君は一生、薬を飲み続ける事になる。その程度の障害を持って生きている人は多い」と言った。

そうした苦勞を重ねて、彼らの一部がやっとプロボクサーになる。しかし彼らの多くが、緒戦で負ける。そして表情がうつろになる。鬱状態になる。そうしてボクサーとして潰れて行く。ボクシング一色に染まった生活をし、ボクシングを通して人間形成をして来た彼らがボクサーとして潰れる事は、しかも十代終わりから二十代初めの彼らがそうした形で潰れる事は、彼らが一人の人間として潰れる事に直結する。ボクサーである彼らが潰れる様子は、時に、学生が夢や目標を失って潰れて行く様子に、良く似ている。彼らは、プロボクサーのヒーローになろうと努力を重ねて来た。しかし彼らは負けた。緒戦で多く負けたボクサーは、ボクサーのヒーローの中にはほばいない。緒戦の何度かの敗戦は、彼らの夢が失われた事、彼らの夢を叶える意味では努力が無に帰した事を意味すると言って良い。そして彼らの多くが十代終わりから二十代初めである。夢を失った時にどう考えれば良いか、どう行動すればよいか、彼らの多くがまだわからない。彼らは若く、とても不器用な生き方しか出来ない。そうした彼らの心理が、落胆で覆われてしまう。かつて筆者もその一人だった。何故、自分が生きているか。試合とは何か。負ける事に何の意味があるか。どうやってボクシングを練習して行けば良いか。それまで数年の苦勞の意味は何だったか。試合に負け鬱状態に陥った筆者にはうまく答えられなかった。

筆者はプロボクサーを引退し10年以上になる。それらの問いにやや自信を持って答えられるようになったのは最近である。現役当時の筆者はジム会長に「努力も苦勞も幾らしても、偶

然のような一発のパンチで無駄になる。だから練習をする意味が無い」と言った事がある。それに対してジム会長は何も答えなかった。その後しばらく、ジム会長は筆者に、インターン学生のような形で初心者や初学者のコーチをさせた。今の筆者なら当時の筆者に、答えなくてはならないなら、「努力も苦勞も、報われるという理由で為す、ものではない」と答える。そして、答えるか答えないか、という自由を許されるなら何も答えない。

上で、ボクサーの若者が夢破れてボクサーとしてあるいは一人の人間として潰れて行く様子を筆者が見てきた限りを説明、描写した。筆者は20年ほどボクサーと学生を兼ねた生活をして来た。筆者には、真面目な学生と、真面目にボクシングに取り組んでいる若者の様子が似て見える。彼らは夢や目標に向け全力で努力している。彼らは、実は叶うかどうかかわからない夢や目標に将来を託し、自分と似た同僚たちに囲まれ、未来を楽観視している。

夢や目標は学生に生きる張りを与える半面、学生を潰しもする。ならば若者は夢や目標など持たないと良いだろうか。与えられた仕事をし、時に遊んで、友人と上手く過ごして、機会に応じて将来を決めて行くべきだろうか。遠い夢や目標に向かって地道な努力を繰り返すなどしてはならないだろうか。答えは否である。では何故、夢や目標を学生は持つべきだろうか。筆者の答の一つを挙げる。

人間は自分の本心を自覚しなければ、非常に追いこまれた時、自分がどうすれば良いかの判断が出来ない。本心、という言葉を使った。本研究は武道の達人の境地を考える立場から進路を考える学生の心得を考える。武道の達人の遺した文献に、「本心」という言葉が書かれている。第2章で武道の達人の遺した文献を詳しく読み解くが、本研究で、「本心」または本心と書く場合、その意味は、武道の達人が「本心」と言って指した内容を意味する。第2章に詳述するが

武道の達人が「本心」と言って指した内容は、その人間にとって本質的な心の〈動き〉、と解釈出来る。自分の本心を自覚しなくても、日常は過ごせる。例えば自分の周囲がどう行動しているかを見渡して周囲と同じ態度を取る、等の生き方をして日常を過ごせる。しかし、ただ一人でいざ鎌倉と追い込まれた時、自分の本心を自覚しなければ、自分がどう行動して良いかわからない。唯一無二の自分らしい生き方を出来なくなる。人間は、自分の本心を自覚してこそ、自分の生き方に責任を果たす、大人になれる。自分の本心を悟るには、自分の本心が本当に望む生き方を、本心だけを持っているのではなく迷妄をも持っている自分が、徹底する必要がある。自分の本心が本当に望む生き方を、迷妄をも持つ自分が、徹底した時、自分は「自分の本心とは、この生き方を望むもの、なのだ」と悟れる。その、自分の本心を悟る為に我々は、本当に望む夢や目標に向かって全力で努力する必要がある。

何故、夢や目標を学生は持つべきか、筆者は次を考える。学生たちは折角、夢や目標のスタートラインの学校に入学した。労働を免除された学生は、学生の分も働き学生を支える者たちに対し責任がある。働く事は、一人の分の責任を果たすだけでも苦しい。それでも学生を支える労働者たちは、学生の分も働いて学生を支えている。一人分以上に働く苦しみを耐えて、彼らは学生たちを支えている。だから学生には全力で勉強する責任がある。そして学生は、学生を支える労働者たちの苦勞を出来るだけ早く終わらせる為に、可能な限り短い期間で夢や目標を叶え、社会に出て労働に参加しなければならない。それが学生の持つ、学生を支える者たちに対する責任だからである。そして学生が社会に出て働き始める時、学生だった彼らが就く職業は、学生時代に彼らが夢見た職業である事が望まれる。何故なら、学生を支えた労働者たち(例えば学生の両親等、学生の学費を請け負うなど

学生が学生である間、学生を守った者たち)は学生が学生の夢を叶える事を望んで、学生を支える為に働いたからである。

特に若い学生ならば、まだ社会や人間を知らず、非現実的な夢や目標を持つ場合もある。その夢や目標が、本心から発生した夢や目標かどうか未検討のままの夢や目標を、その学生が彼らの本心から発生した夢や目標と信じ込んでいる場合もある。だから、夢や目標は、全て叶えなくてはならないものではない。叶わない方が幸せに生きられる夢や目標もある。それでも、本心から学生がその夢や目標を望むのなら、その夢や目標は、叶えた方が良い。第2章に詳述するが、本心に基づいて生き方を決める事は、学生が生きる事だからである。また学生が彼ら自身を学び、より深い境地に立って生きる事だからである。

こう考えると学生は、彼らを支える者たちの為にも、夢や目標を持つべきである。しかし夢や目標は学生に生きる張りを与えるが、夢破れた学生を潰しもする。学生は夢や目標を持つべきで、そして夢や目標は危険でもあるのである。では学生は、夢や目標を持つ時、同時にどんな心得を持つべきか。未来を拓く目覚ましい力を持つと同時に、時に学生を潰す夢や目標に対し、学生はどんな心得を持つべきか。

1.2. 先行研究の概観と本研究の位置づけ

国内の進路指導研究の一つに生駒俊樹と梅澤正の研究がある³⁾。生駒と梅澤の研究は、前半を生駒が、後半を梅澤が執筆した。生駒は、高校で社会科教師をしていた時期、大学で進路指導を研究する教師をしている今に至る時期を通して、彼がどんな進路指導をして来たか、を述べた。生駒は進路指導をする教師たちに対し、進路指導の入門編的内容を述べている。彼はどんな態度で生徒に向かうべきか事細かに、進路指導について語っている。

後半を執筆した梅澤は、職業という概念の本

質を考察した。職業とは経済生活に必要な賃金を得る目的の仕事を目指すだけではない、と梅澤は指摘した。彼の主張を、人間らしく生き、働く喜びを得る等を支えるのが職業であると要約できる。梅澤は職業という概念が一般に偏狭に捉えられている事を指摘した。若者が偏狭な職業観に基づいた職業選択に走りがち、と警鐘を鳴らした。

体育学の領域にも進路指導研究はある。例えば三木ひろみと三波千穂美の研究⁴⁻⁶⁾がある。三木と三波は体育学部1、2年生に、学生の進路を決める態度を養成する授業を行った。そしてその効果を検討した。三木と三波の共同研究は三つある。三木と三波は大学の1学期から2学期に渡る授業を研究した。三つの研究はそれぞれ、進路について考えてみよう、と教師が学生に提案する事から始まる。学生には幾つか課題が課される。インターネット等で自分の興味のある職業の実際や関わる事柄を調べる課題、学生をグループ分けしその調査結果をグループの他の学生たちにプレゼンテーションする課題、就職の為の面接試験を模擬してグループの中で試験官役と受験生役に分かれ交代しながら試験の練習をする課題、等が学生に課される。三木と三波の授業は学部2年生の夏休み前までに終わる。したがって学生には、これから就職活動が始まる時期に、就職活動をどうやって行えば良いか、という全体像が渡される事になる。また、これから就職活動が始まる時期に、既に半年に渡り自分の就職を考えて来た、という半年分の知見や内省の結果も渡される事になる。

三木と三波⁶⁾は、今後の課題として、学生に行動を促す働きかけだけでなく、大学の就職課とも連携して学生をサポートする事の必要を挙げている。何故なら、体育学部の学生に対しての就職情報は、大学の就職課にも少ないからである。また、体育学部の学生の、日々の授業や競技生活で蓄積された知見は、他学部の学生た

ちには得られないものである。これらの知見は体育学部生の個性と一人の人間全体としての能力や職業人としての能力を形成している。従って三木と三波は今後、教師と大学の就職課が連携して、体育学部生が体育学部生の専門領域と具体的な職業を結び付け易くなる情報提供や活動の提案を積極的に行うべき、と考えている。

以上、進路指導の先行研究の一部と体育学領域の進路指導研究の一部を概観した。ただ、これらの先行研究には、学生が本心では本当はどんな人生を生きたいのか、学生の本心は何なのか、という視点は無い。進路指導とは本来、学生がどんな仕事をどんな働き方で為して生きて行きたいのか、学生の本心を教師が学生と一緒に探す、ものである。だから進路指導は教育の一貫である。しかし本心を重んじる向きの進路指導研究は為されていない。

1.3. 目的と方法

本研究の目的は、学生が進路を決める時にどんな心得を持つべきか、を明らかにする事である。

本研究の方法は、武道の達人が遺した文献⁷⁾の解釈と、それに基づいた論考からなっている。やはり武道の達人も学び、禅者と相当に近い境地に立つと考えられる、中国の古典哲学の文献⁸⁾も解釈しそれに基づいて論考した。主に参照した文献は江戸時代初期の剣の達人、柳生宗矩の遺した「兵法家伝書」と、中国の紀元前4世紀の人物と考えられている莊子と莊子の後学によって数世紀を経て遺されたと考えられている哲学書「莊子」である。

本研究の方法では、武道、芸道の達人が遺した文献を解釈しなければならない。その時、武道、芸道の達人と同じ境地に立たなければ彼らが遺した文献を読み解けない。だから本研究の方法では、研究者自身が達人の境地に立つ必要がある。その為、本研究の方法として筆者は、半生20年練習したボクシングの実践を尚、続

ける事で達人の境地を理解しようとした。本研究は、達人に届こうとして届き切れない研究者自身が半生のボクシング経験を尚、続けながら達人の言説を理解し述べた研究である。それ以上でない。ただ、達人になり切った者は、一般者の迷妄を理解出来なくなる。何故なら達人になり切った者は、無心の境地に立ち切ってしまい、無心の境地しか理解出来なくなるからである。だから達人になり切った者は一般者の境地と達人の境地を比較出来ない。だから達人になり切った者は、達人の境地が一般者とどう違うのか、も説明出来ない。達人に届こうとして達人になり切れない一般者こそ、達人の境地を一般者の境地と比較して、説明出来る。

筆者には2年間ほど、ボクシング練習を中断していた時期がある。その2年間、3つのアルバイトをして人と接しボクシングジムでは積み重なった経験を積み、出来るだけ多くの本を読む机上の訓練を積んだ。2年が過ぎてボクシングジムでの練習を再開した時、筆者の体には脂肪が付き、ボクサーでない一般者の体に近くなっていた。しかしボクシングの技術は衰えていなかった。また技術ではないボクシングに対する考え方や姿勢全体が大きく向上していた。筆者のボクシングのコーチは、ジムでの練習を中断する前とジムに復帰後を比べて、筆者が飛躍的に強くなった事を認めた。筆者は今、もしジムで練習を中断していた2年間に筆者が筆者自身を向上させる努力を止めてしまっていたら、また「近い将来きっとボクサーに戻ろう」という願いを捨ててしまっていたら、ジムでの練習を再開したとしても、きっと弱くなってしまっていただろうと考える。他の武道、芸道等と同じにボクシングにも、そのボクサーの人間性や考え方、生き方の姿勢全体が大きく表現される。そのボクサーが、ボクシングの練習をしない時期があったとしても、一人の人間として向上し続けようとする限り、彼のボクシングは向上する。そして、練習を続けていたとしても、

ただ練習を続けているだけで一人の人間として向上する意志が薄ければ薄いほど、彼のボクシングは向上しない。一人の人間として向上する意志が無ければ、その者の人間性が真面目さや厳しさを失って行くのに比例するようにして彼のボクシングも退化する。達人は、その道の修行を通して人間として向上し続け、その達人の人間性を表すその道のわざも向上させ続けようとする。達人の境地とは、人間としての向上を止めない境地、でもある。

だから本研究の為に研究者自身が達人の境地に近づこうとすれば、ボクシング練習も含めた生活全体を通して人間性の向上を目指し続ける必要があった。だから本研究で研究者はボクシングの練習を続けた。そしてボクシングの練習が反映する研究者の生活の全体も、向上させようと思志し続けた。

2. 進路を考える学生の心得

2.1. 生き方を会得した達人の境地とは何か

中学校や高校を卒業する十代の学生や二十代初めが多く大学を卒業する学生には、生き方を会得する事は不可能なくらい難しい。進路を決める、とは例えば学生がどこに就職や進学をするかを決める、学校を卒業した後どのような生き方をするかを決める、という意味である。進路決定を十全に、自分がどうすれば良いかを悟って出来る者は、生き方を会得している者である。生き方を間違えば死ぬかも知れない状況でも恐れず進路決定出来る者である。日々時々刻々、次に何を為すべきか十全に悟れる者は、生き方を会得している。剣の達人は斬られれば死ぬ斬り合いの中でも慌てず、自分らしく生きる事が出来る。進路を考える学生の心得を明らかにする為には、生き方を会得した達人の境地とは何か、を理解しなければならない。

2.1.1. 無心・本心・妄心

江戸時代初期の剣の達人に柳生宗矩（1571-1646）がいる。柳生宗矩は沢庵和尚（1573-1645）に師事して禅を学び、無心になる修行をした。柳生宗矩の遺した剣の伝書、兵法家伝書に「本心」と「妄心」という言葉が書かれている^{9）}。

心に本心、妄心とて二つあり。本心を得て、本心の様になせば、一切の事すぐ也。此本心、妄心におはれてまがりけがれぬれば、一切のしわざまがりけがれぬる也（中略）。本心と云ふは、本来の面目、父母未生以前よりそなはりて、かたちなければ、生ずると云ふ事なし、滅する事なし。形こそは父母もうみなせ、心はかたちなければ、父母の生みなせりともいひがたし。人生るれば、そなはりて此身にあり。

禅は此心を伝へたる宗旨也と承はる所也（中略）。妄心といつば、血気也、私也（中略）。わが愛する所を人にくめば、怒り恨み、或は又わがにくむ所を人同じ心ににくめば、悦びをなし、非をまげて理となす（中略）。是を妄心と云ふ也（中略）。妄心は皆、何事をなせども邪也。此邪の心が出でたらば、兵法も負くべし、弓もあたるべからず、鉄炮もはづるべし、馬ものるまじ、のふも見ぐるしかるべし、舞もきゝぐるしかるべし、云ふ事もあやまりあらはるべし。一切皆たがふべし。本心にかなはず、何事も皆よろしかるべし（中略）。本心にかなはず、兵法は名人なるべし。ありとあらゆる程の事、一つも此道理にはづるべからず^{9）}。

兵法家伝書を訳注した渡辺一郎は、「本心」を「本然の心。私欲に履われない心。正心」と説明した。「妄心」を「迷妄の心」と説明した^{10）}。柳生宗矩は兵法家伝書で「本心」と「妄心」を次と説明した。

兵法家伝書から解釈すると「本心」はその者に本質的な心、本当に大事で捨て忘れられない

心、である。「妄心」はその者に非本質的な心、本当はどうでも良い心、である。

筆者は筆者のボクシング経験から、柳生宗矩の言う「本心」とは、自分に本質的な心の〈動き〉、と解釈する。何故筆者が「本心」を、自分に本質的な心の〈動き〉と解釈するかと言うなら、理由は、次である。

筆者が記憶する最も苦しかったボクシング練習中、筆者を練習させ続けていた原因となるものは、その時の筆者の、言葉にすれば「納得出来ない」と表現されるような、強烈な心の〈動き〉の感覚だった。「強烈な心の〈動き〉の感覚」という言い方でわかり難ければ、「こんな半端な練習の終わり方では納得出来ない」という強い衝動」と言っても良い。人が行動する時、全て行動に於いて、その行動の発端は心の〈動き〉である。やはり心の〈動き〉という言い方がわかり難ければ、人の行動の発端は「それをした方が良い」とか「それをしたい」という心の衝動である。人はまず自分の心の〈動き〉、心の衝動を感じて、感じた事実に基づいて行動する。考える事や言葉に表現する事は全て、心の〈動き〉、心の衝動を感じた後に為される。そう考えると人が生きて自分の行動や態度や生き方を決定して行く時、最も肝心なものは、自分の心の〈動き〉、自分の心の衝動、と考えられる。他者に、ある行動をとる為の心の〈動き〉、心の衝動、が起こったからと言ってその他者と同じ状況でも自分に同じ心の〈動き〉、心の衝動が起こるとは限らない。幼子と母親のように心理的距離が近い二者でさえ、他者の心の〈動き〉と自分の心の〈動き〉は違う。全くの他人同士なら一層そうである。だからこそ人間は一人一人、唯一無二のかけがえの無い存在である。一人一人が違う、心の〈動き〉、心の衝動は、人間個々にとってかけがえの無い、その者にとって本質的なものである。心の〈動き〉、心の衝動には、無限に高価なその者個人の意味・価値がある。心の〈動き〉、心の衝動には、その者

が生まれてから今までどんな生き方をして来たか、誰に恩をもらい、誰をどう助けて生きて来たか、何を見、何を聞き、何を读み、何を勉強して生きて来たか、その者独自の生き方が、全てと言って良いくらいに反映される。この心の、その者にとって本質的な〈動き〉、その者の心の本質的な衝動を、柳生宗矩の言う「本心」と解釈して間違い無いだろう。柳生宗矩が「父母未生以前よりそなはりて、かたちなければ、生ずると云ふ事なし、滅する事なし。形こそは父母もうみなせ、心はかたちなければ、父母の生みなせりともいひがたし。人生るれば、そなはりて此身にあり」と表現した、個々独自の心の在り様、心の〈動き〉、心の衝動が「本心」だろう。

では、〈動き〉、とは何か、と問うならば、人の心とは〈動き〉の集合である。心全体が一つの〈動き〉としても成り立つ。例えばあるボクサーの試合や練習での非常な頑張り、その試合や練習を見る者が感動した時、その感動は全体として一つの感動としての〈動き〉だが、その感動としての〈動き〉には、部分として、その試合や練習を見る者の過去の記憶の回想や、驚き、悲しみ、喜び、寂しさ、幸福感、等が一つ一つ〈動き〉として集合している。

心は例えば風にも似ている。風は全体として空気の〈動き〉で、その全体は部分としての空気の〈動き〉の集合である。例えばある地方に吹く南風は南へ向かう空気の〈動き〉である。その南風の中に、その地方のある町や村に吹く西風という空気の〈動き〉が含まれている場合もある。そしてその地方のその町のある人物の目の前で、やはりその西風の部分としての空気の〈動き〉が、小さなつむじ風となって木の葉を巻いている時もある。風も心も、ある地方の南風がその地方のある町の西風や小さなつむじ風の集合であるように、部分から全体を見れば〈動き〉の集合である。けれど風も心も、ある地方にはあくまで全体として南風が吹いていた

ように、全体の〈動き〉を見れば部分の〈動き〉は見えない。悲しみの全体に打ちひしがれた心は、その悲しい結果に含まれた部分である小さな成功になかなか気づかない。大きな成功の喜びの最中、小さな失敗は無視されがちである。心の全体は〈動き〉である。その心の全体には部分の〈動き〉が多数か無数に含まれ集合している。「心の〈動き〉」は「〈動きの集合〉の〈動き〉」である。心全体を見る時に部分の心の〈動き〉は見えなくなる。または見え難くなる。部分の心の〈動き〉を見る時、心の全体は見えなくなる。または見え難くなる。

そして、心の〈動き〉には、その者にとって本質的で無視出来ない本心の〈動き〉と、その者にとって本質的でなく無視出来る妄心の〈動き〉がある。例えば、幼児にとって母親を求める心の〈動き〉は無視出来ない。母親を求める心の〈動き〉は幼児の本質である。幼児の母親にとっても彼女の子を求める心の〈動き〉は無視出来ない。彼女の子を求める心の〈動き〉はその母親の本質である。一方でその幼児にとり、母親でない、友達や幼稚園の先生、叔父や叔母等を求める心の〈動き〉は本質的でない。無視出来る。この事は、多くの人に理解出来るだろう。母親でない、友達や幼稚園の先生、叔父や叔母等との間にも幼児が本心で接する関係は、成立する。しかし友達や幼稚園の先生、叔父や叔母等との間で幼児は、母親との間のように、強烈で常時の本心で接する関係を持たない。

人には皆、「本心」がある。ただ、柳生宗矩は兵法家伝書で「本心」を剣の奥義として書いた。人は皆、「本心」という心の〈動き〉を持っている。しかし人は皆、己の「本心」とは何か、を簡単には自覚出来ない。人は、自分に非本質的な多くの妄心という心の〈動き〉が多く感じられる中で、本心という心の〈動き〉を抽出して自覚する事が簡単ではない。

筆者が筆者の「本心」という心の〈動き〉に気づいたのは、30歳を過ぎた頃の夏のボクシ

ング練習中だった。その日は特に暑かった。筆者は体力の消耗は勿論、心理的にも消耗していた。サンドバッグ打ちの練習で、筆者はその日に打つと決めたラウンド数を既に消化していた。しかし筆者はその時、既に消化したラウンド内容に納得が出来なかった。筆者は暑さと消耗を押して、サンドバッグを打ち続けた。その時、筆者にそうさせたのは、納得出来ない、という心の強い〈動き〉の感覚だった。この日、筆者は、普通の練習者が打つ一般的な練習量の2倍、3倍、サンドバッグを打った。筆者はその時、心も体も非常に疲労していた。その時、考えていた内容は、次のラウンドにまだサンドッグを打つか、それとももう止めるか、それだけだった。その日は、それしか心の〈動き〉が無くなるくらい、自分を追い込む事が出来た。「納得出来るまでサンドバッグを打ちたい」という心の〈動き〉と、「もう練習を続けるのが嫌ですぐにでも練習を止めたい」という心の〈動き〉と、その二つの心の〈動き〉しか、筆者にはその時、無かった。筆者はその時、自分がサンドバッグを打ち続けているのは、言葉にすれば「納得が出来ない」という自分の心の〈動き〉の感覚の為だと気づいた。そしてその感覚が指し示すものは心の、自分に本質的で無視し難い、〈動き〉、であると気づいた。

今、その時の感覚を達人の境地を考える立場から考えると、その納得の出来なさには、短絡的でない背景がある。その時の感覚は「さっぱり爽快に練習を終えたい」だけの短絡的な納得の出来なさではなかった。30歳も過ぎて、同期の練習生の殆どがとうに引退して、社会的にも不安定なボクサーで在野の研究者である筆者を、家族が支えていた。ボクシングは筆者の研究の実験であり、ボクシングの実践無しでは筆者の研究は成り立たなかった。筆者が筆者のその時と将来に不安を感じていたのと同じに、家族も筆者のその時と将来に不安を感じていた。それでも、家族は筆者にボクシングと研究を続

ける事を許していた。だからその時、筆者には、家族にも社会にも胸を張れるだけのボクシングと研究の仕事を日々続ける責任があった。どうすれば研究を仕事とする者として、家族や社会に対して責任を果たせるか、どれだけ研究の実験であるボクシング練習をしたら研究を仕事とする者として責任を果たせるか、筆者はわかっていなかった。だから一般の2倍も3倍も練習する日々を繰り返していた。

そのサンドバッグ練習時の「納得が出来ない」という心の〈動き〉の感覚は、言わば、家族等の為にも「納得が出来ない」という心の〈動き〉の感覚だった。その「納得が出来ない」という心の〈動き〉は、筆者が愛する者たちの為でもあった。その心の〈動き〉が筆者に与えたものは、筆者にとって、愛する者を守ろうと意志して行為行動する時に感じられる感覚を経験した事実だった。だから、その心の〈動き〉の感覚を経験した事実は筆者にとって本質的だった。この経験した事実から筆者は、人の本質を「本心」という自分の心の〈動き〉、と考える。

心の〈動き〉には、その者にとって非本質的で無視も出来る〈動き〉もある。兵法家伝書に倣えば、そうした、その者にとって非本質的な〈動き〉は「妄心」である。

また、「無心」は、心が無い、と書く。妄心の無い、本心だけの達人の境地は、本心ただそれだけしか無いから最も心が無い境地に近いので、「無心」と呼ぶ、とも解釈できる。また一方で、本心と妄心が混じった混沌の心は、本心でもなく妄心でもないから、名づけようさえ無い。だから混沌の心が最も無に近いので、「無心」と呼ぶ、とも解釈できる。本心を指して「無心」と呼ぶにせよ、混沌の心を指して「無心」と呼ぶにせよ、本心か混沌の心か、一つしかない心を「無心」と呼ぶ、と解釈できる。

2.1.2. 本心に基づいて考える事の必要性

禅者鈴木大拙(1870-1966)が「無分別の分別」

と無心の境地を紹介した¹¹⁾。禅では全てのものに仏性はある、と考えると聞く。仏性とは「本心」と考えて良い。子犬にも禅師にも同じく仏性、「本心」はある。ただ子犬は「本心」という心の〈動き〉を感じた経験の事実に基づいて考えはしない。人間は子犬と違う。人間は「本心」という心の〈動き〉を感じた経験の事実に基づいて考える。子犬は本心を感じる無分別だけである。無心の境地に立つ人間は、「本心」を感じて考えない無分別だけでなく、「本心」を感じた経験の事実に基づいて考えて（分別して）行動する。だから人間の無心の境地は「無分別の分別」、と鈴木大拙は説明した。

特に例えば自分の本心をより深く学ぼうと自分に無理を課すボクサーは、無分別の分別でなければならない。自分に無理を課す時、自分の行為の危険性を考える事は、自他に対する修行者の責任だからである。

2.1.3. 達人が命懸けになれるのは何故か

達人の無心の境地は、本心という心の〈動き〉を感じる境地である。

達人は自分の本質が〈動き〉であると悟っている。そしてその〈動き〉は、風に舞う落ち葉の動きも、昇り落ちる日の動きも、同じである。〈動き〉があれば、当然、〈動かない〉もある。動と不動とは、明と暗のように、片方が存在すればもう片方も必ず存在してしまうからである。生きた我々の本質が〈動き〉であるとすれば、〈動かない〉は死の本質であると考えて良いだろう。達人はそのように、生と死の真髄を悟っている、とも考えられる。

江戸時代中期の剣の伝書に「猫之妙術」¹²⁾がある。幕末から明治初期の禅・剣・書の達人山岡鉄舟(1836-1888)は「猫之妙術」を秘蔵し愛読したと言われている。「猫之妙術」は「田舎荘子」¹³⁾という書物の一節である。「田舎荘子」は、中国の古典哲学書「荘子」の哲学を物語風に書いた書物である。「荘子」は、世界を統べ

る秩序の存在を訴える。例えば、パンが三つある。今晚、一つを食べれば明日の朝は二つになっている。秩序づけられ必ず、である。世界にはこのように秩序がある。「荘子」は秩序に逆らわない生き方を訴える。たとえ死ぬ事になろうとも、生死があるのは世界を統べる秩序の結果だから悲しまない、と「荘子」は訴える。自分の死を前にしても騒がない、動じない。人生を全て、世界を統べる秩序に任す、それが「荘子」の哲学である。当たり前の事を、当たり前に為す、それが「荘子」の哲学である。当たり前の事は、世界を統べる秩序に適う。当たり前の事を為す心は、世界を統べる秩序に適う¹⁴⁾。

禅にも鍛えられた達人は死を恐れない。「荘子」に書かれたように老荘思想の哲学者も死を恐れない。老荘思想の特に「荘子」は、人が本心、無心になればその心は世界を統べる秩序に一致する、と考える。

本心、無心の境地に立つ達人は、生と死が切り離せない、物事の二面であると悟っている。それに世界には、世界を統べる秩序があると悟っている。自分の命もその秩序の中で生死が決まる、と悟っている。達人は本心、無心となってその秩序に自分の心を一致させている。だから本心、無心の達人は死を恐れない。剣の達人は、斬り合いに臨んで死を恐れない。達人は、自分が生きる事を許される限り、本心で生き続ける。剣の達人ならば、斬り合いの中で自分が生きる事を許される限り、本心のままに剣を振るい続ける。武士ならば、それは家の名誉の為であり、自分が死んだ後に生き残る家族の為でもあっただろう。

2.2. 生きるとはどういう事か

生きている、とはその個体を独立した個体と考える立場で見た時に、その個体が自分で自分の在り方を決めている事、と言って良いだろう。人を独立個体と考える立場をとった時、人が生きる為には、その人が自分で自分の在り方を決

めなければならない。その為には、人は自分の本心を自覚して、感じた本心の事実に基づいてだけ行動し考えて、自分の在り方を決めなければならない。前述のように兵法家伝書を訳注した渡辺一郎は「妄心」を「迷妄の心」と解説した。もし妄心という迷妄の心に従って自分の在り方を決めてしまったら、その者はその者にとって非本質的な心（妄心という迷妄の心）に流された。「流される」という表現が適切なくらいに、時に非本質的な心は魅力的に我々を引き付ける。そして本当は本心に従わなければならない事を我々は自覚していながら、妄心の魅力に引かれて本心には基づかない行動を取ってしまう。妄心の魅力に引かれて本心には基づかない行動を取ってしまったら、その者は厳密には、自分で自分の生き方、在り方を決めていない。自分の非本質である妄心の魅力に引かれて、自分の生き方、在り方が決まってしまった。その者はその時、自ら生きたのではない。生物学的・医学的には生きていても、厳密には死んでしまった。だから人が生きるという事は、人が本心を悟って（無心の境地に立って）初めて出来る。

赤子やほんの小さな幼児には、妄心が無い。彼らは本心のままに生きている。彼らの生には、自ら生きている、という言い方をするよりも、生きてしまっている、と言った方が適切な場合も多い。妄心という迷妄の心に悩みながら、妄心に紛れた本心を見つけ出して、本心に従って自ら自分の在り方を決断し生きようとする大人に比べれば、本心を感じるままに生きている幼児の様子は、自ら生きているのではなく、生きてしまっている、に近い場合も多い。大人に近づけば妄心が生じる。ただ大人には、たとえ時にはそれが難しく、常に十全に出来るのではないとしても、妄心と本心を自覚し区別する能力も備わっている。大人は妄心を去り、本心を感じた事実に基づいて、自分の在り方を考えて、決断する。そうする事で大人は自覚的に生きる

事が出来る。生きてしまっている者、に成らず、自ら生きている者、に成る事が出来る。

2.3. 自分を学ぶ事と生きる事

大人が自覚的に生きるという事は、自分の本心を悟って、本心に基づいて考え、自分の在り方を決める事である。自分を学ぶという事は、どういう事だろうか。

例えば筆者はボクサーとしてサンドバッグを叩きながら体の苦しさに耐え、途中で練習を中止して逃げ出したい迷妄の妄心を去り、自分の本心を感じようとする。今までよりも昨日までよりももっと深い、未知の自分の本心を悟ろうとする。そして本心を感じた事実に基づいて考え、自分の在り方を決めようとする。そしてそれは、生きる、という事と全く同じである。

そう考えると人が、自分を学ぶ事と生きる事、は同じ一つの事と考えられる。人は体の苦しさに耐えて、本心も妄心も含んだ自分をより深く学ぼうとし、自分の本心をより深く学ぼうとし、そうする事で生きている。自分を学ぶ事がそのまま生きる事である。

2.4. 自分を学ぶ者、生きる者の責任

自分を学ぶ能力を持って生まれた、自ら生きる能力を持って生まれた、全ての人間には、責任が課されている。その責任が課されている理由は、生まれたならば生きなければならない、という事と同じく自明である。学生が進路を考える時、彼らは彼らの責任を考えなければならない。「自分の本心がそれを求めている」と、浅薄にしか自分の心を省みず、無責任な進路選択をする事は、彼らには許されない。学生には、彼らを支えた大勢の支持者たちに対し、責任がある。もっと言えば、学生に成る以前に、人間として生まれた以上、彼らには責任がある。彼ら学生が進路はその責任を果たせるよう、決めなくてはならない。

以下、自分を学び世界を豊かに創造する能力

のある人間である、我々一人一人に課された責任を明らかにする。

1. 人には他の生物に無い、自分を学び世界を豊かに創造する能力がある。自分を学ぶ事は、自分という世界の一部を豊かに創造する事である。また自分が関わる世界を、豊かに創造された自分で豊かに創造して行く事でもある。一方で人は迷妄の妄心に流されて自分を学ばないと世界を貧しく破壊してしまう。自分を学ばないと自分という世界の一部を貧しくしてしまう。貧しくなった自分で、自分が関わる世界を貧しくしてしまう。
2. 人間に生まれた以上、人には自分を含めた世界を豊かに創造し続ける責任がある。我々にこの責任がある理由を類推して説明するならば例えば、我々には生まれた以上、生きる責任がある。それは自明である。我々に自分を含めた世界を豊かに創造し続ける責任がある理由はそれと同じに自明である。我々には、人間に生まれた以上、自分を含めた世界を豊かに創造し続ける責任がある。世界を貧しくも豊かにも出来る自由がある時、我々は世界を豊かにしなくてはならない。
3. 達人は、本心を追い本心に基づいてだけ考えて、この責任を果たす。そして達人でない我々人間一人一人にもこの責任はある。自分の本心を裏切る生き方をせず、苦しさに耐えても本心を感じて、感じた事実に基づいて自分の在り方を決める生き方をすれば、誰もこの責任を果たせる。

3. 学生を支えた恩人たちの為に

学生が進路を考える時も、この責任は同じに課されている。従って学生には、苦しさに耐え

ても自分の本心を感じ、感じた事実に基づいてだけ考える事しか、本当は許されない。学生には彼自身という人間を今まで以上に学び人間らしく生きる事しか許されない。自分を学び、人間らしく生き、世界を豊かに創造するという人間の責任の為である。

前述のように、世界には世界を統べる秩序がある、と中国の古典哲学は考える。人は自分の本心を見抜く事で、自分が関わる世界を統べる秩序を見抜ける。学生の本心がもし、教師になりたいと〈動く〉ならどうだろうか。その時、その学生は教師にしか、なつてはいけない。彼の本心が適う世界を統べる秩序は、その学生が教師になって行くよう、決まっているからである。彼が本心を見無視し世界を統べる秩序に適わない生き方をすれば、世界は破壊されてしまう。従って彼が本心を見無視して教師にならなければ、世界を破壊してしまう。貧しくしてしまう。

例えば、自分が何をして生きたいかの本心を悟らない学生ではなく、何をして生きたいか本心を悟った学生がいるとする。彼が本心から教師になりたければ、彼は教師を目指す努力を重ねる。彼には彼の努力を支援する家族や教師や仲間もいる。

その彼が例えば経済的な豊かさを求めて突然、今まで見向きもしなかった他の職業に就くよう鞍替えしたら、彼を今まで支える事に真剣だった彼の親や教師や仲間はどうか。その時、彼らは何の為に彼を支えて来たか、わからなくなってしまう。彼の親や教師や仲間の心は、貧しく破壊される。本心から教師を目指す長年の目標を安易に捨て、迷妄の妄心の為に経済的な豊かさを追って適当な職業に就いて、その学生の心も貧しく破壊される。

このように、特に自分の本心を悟った学生は、進路を考える時、たとえ苦しくても本心にだけ基づいて考え、本心に適う進路をしか取れない。彼を今まで支えた親や教師や仲間の為にも、彼自身の為にも、である。

本心は、誰にとっても追い切れない。本心を追い尽くした時、その者は、本心を追い切ってしまった体への負担の為、生物学的、医学的に死ぬ場合さえある。また、本心への99%の正直さと100%の正直さの間には無限に深い溝がある。従って人間は、滅多に本心を追い切れない。それは本心を追ってみれば誰にもわかる。ただ人間は時に一瞬の真剣さで、気が付いたら本心が自分に要求した本心への正直さを一瞬だけ遥かに超えてしまった、という時もある。そうした、一瞬の極度の正直さで、伴う体の苦しきの為に今まで知る事が出来なかった自分の本心を、我々は学ぶ。一度でも我々が、体の苦しきの為に自分が今まで知る事が出来なかった自分を、知り学ぶ機会に出会えばそれが、「自分には未だ知らない本心がある」「自分はまだ自分をわかり切っていない」と、自分を学び続けるきっかけになる。きっかけを掴んで、人は努力を続ける。一瞬の真剣さと不断の努力を繰り返して、我々は自分の本心を今までよりも深く学ぶ。そうして我々が自分を学び続け成長する姿が、我々を支えた親や教師や仲間たちに、恩を返す。彼らに「彼を支えて良かった。幸せだった」と思ってもらえることが出来る。自分の恩人を幸せにすることが出来る。そうやって我々は、自分に本心を追う努力を許した周囲世界を、今まで以上に豊かに、幸せに出来る。

第1章第1節最後に、「未来を拓く目覚ましい力を持つと同時に、時に学生を潰す夢や目標に対し、学生はどんな心得を持つべきか」と問うた。その答えは、〈学生自身の本心を悟れ。それが進路を考える学生の心得だ〉、である。本心を悟って、それでも学生が潰れたならば、それは仕方が無い。彼の本心が適う世界を統べる秩序が、彼が潰れる事を運命付けた、という事である。本心を追って例えば、命を落とした、偉人は多い。ただ、彼らは本心を追い人間らしく生きて、その結果、死んだ。彼らが死ぬ時、不幸だった、とは誰も言い切れない。そして筆

者の知る限り、本心を追う事は、本心を追った者を不幸にはしない。我々の本心は、我々が生きて幸せになるようにだけ、我々に関わる人を生かして幸せにするようにだけ、〈動く〉。だから我々は、夢や目標を持つ時、自分の本心を悟ろうと心得なくてはならないだろう。幸せになる為、幸せにする為、である。

凡例

< > は語句の区切り等を示す為に用いた。

注および引用・参考文献

- ¹⁾ 大辞林 第三版。三省堂。
- ²⁾ 「学生が潰れる」という言い方をしたがこの言葉は本研究では、夢や目標を失った学生が、何故彼らが努力して来たか、何故今も彼らが努力しているか、彼ら自身わからなくなり、努力を止めてしまう事、彼らに期待して彼らの恩人が彼らに託してくれた大事なものの（例えば学生の両親が学生の為に学費を用意してくれたなら、その学費等）を捨ててしまう事、学校を辞めて比較的就職が容易でしかも彼らが本当には目標にして来なかった職業に就いてしまう事、等を意味する。そうした彼らを僅かでも見て来た筆者の印象では、特に夢や目標を失った直後、彼らは一人の人間として危険な状態になってしまう。彼らの様子は時には病人のようでさえある。その様子を指して「潰れる」という言い方をした。
- ³⁾ 例えば、生駒俊樹・梅澤正（2013）キャリアデザイン支援と職業学習。京都、ナカニシヤ出版。がある。
- ⁴⁾ 三木ひろみ、三波千穂美（2007）。「総合的な学習の時間」のための教職科目—体育専攻生のキャリアプランニング教育として。筑波大学体育科学系紀要。30, 47-61.
- ⁵⁾ 三木ひろみ、三波千穂美（2008）。体育専攻大学生のキャリアプランニング教育—職

- 業意識を高めるための授業「総合演習Ⅱ」の効果. 筑波大学体育科学系紀要. 31, 109-129.
- ⁶⁾ 三木ひろみ, 三波千穂美 (2010). 体育専攻大学生のキャリアプランニング教育—将来の進路に向けて行動化を促す総合演習の効果. 筑波大学体育科学系紀要. 33, 47-58.
- ⁷⁾ 柳生宗矩, 渡辺一郎校注 (1985). 兵法家伝書. 東京, 岩波書店.
- ⁸⁾ 金谷治訳注 (1971). 莊子第一冊. 東京, 岩波書店. 金谷治訳注 (1975). 莊子第二冊. 東京, 岩波書店. 金谷治訳注 (1982). 莊子第三冊. 東京, 岩波書店. 金谷治訳注 (1983). 莊子第四冊. 東京, 岩波書店.
- ⁹⁾ 柳生宗矩, 渡辺一郎校注 (1985), 前掲書, pp.94-97.
- ¹⁰⁾ 同上書, pp.91-92.
- ¹¹⁾ 鈴木大拙. (1990). 禅の思想 新版 鈴木大拙禅選集第一巻. 東京, 春秋社, pp.182, 188, 202-205.
- ¹²⁾ 渡辺一郎編 (1979). 第一講 佚斎樗山『猫之妙術』. 武道の名著. 東京, 東京コピー出版部, pp.7-16.
- ¹³⁾ 飯倉洋一 (校訂) (1988). 叢書江戸文庫 13 佚斎樗山集. 原道生, 高田衛 (編). 東京, 国書刊行会, pp.5-123, pp.359-421.
- ¹⁴⁾ この「莊子」の哲学の解説は、金谷治訳注 (1971), 前掲書, pp.7-14. を参考にした.

受付 2015 年 2 月 3 日

受理 2015 年 7 月 27 日